

平成二十八年年度
名寄市立大学 保健福祉学部
一般入試 後期日程

小 論 文 問 題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、受験票、筆記用具、消しゴム、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、ティッシュペーパー以外、不要なものは置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は黙って手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文を読み、あとの問に答えなさい。

ミヒヤエル・エンデという、ドイツの童話作家が書いた短い寓話に『自由の牢獄』^{ろうじく}という文章がある。それはイスラム教の世界の話で、イッシーアラールという知恵のあるこじきだが、王様のような偉い人に自分の体験談を話している、という設定で話が進む。

イッシーアラールは若い頃、商売人だった。商売に成功して富豪になったが、そのため自分の力でなんでもできると傲慢になっていく。イスラム教の大事な教えも無視して遊びほうけていたが、あるとき彼の前に、美しい女がやってきた。イッシーアラールはその女に一目惚れ^ぼをして、我がものにしたと思った。ところが女は、誘惑はするのだけでも、「私がほしいなら、これからの人生、何ものにも従わず、自分の意志だけで動く^{まなざ}と誓つてほしい」と言うのだ。イッシーアラールが「神にかけて誓つ」と答えると、「それは神様に従っているからダメだ」と女は言う。そこで、「自分の眼差し^{まなざ}にかけて」と誓い、いよいよ女を抱こうとした瞬間、彼女は消えてしまう。しかも彼自身、いつの間にか宇宙空間のようなところに飛ばされ、気がついたら大きな部屋の中にいる。女は悪魔の化身だったのだ。部屋にはいくつものドアがあり、そのどれにも鍵はかかっていない。しかし、イッシーアラールはどの扉から出たらいいのかわからない。ドアの向こうが地獄なのか花畑なのか分からず、考えれば考えるほど、どのドアから出ればいいのかまったく分からなくなってしまう。そして彼はついに、そこから出られなくなる……。

鍵が開いているのに部屋から出ることができない——これは一つの逆説だ。普通、「自由がない」というのは、牢獄のような閉じられた場所に入れられた状態だと私たちは考える。それに対して、部屋のドアが開いていれば、「自由がある」と思う。いつ、部屋から出て行ってもかまわないからだ。ところがこの話は、あまりにもたくさん選択肢があることが、逆に牢獄だと感じられるということを示している。自由がありすぎて自由がない。そういう逆説だ。

この話はイスラム世界の物語としてつくられてはいるが、私たちが今置かれている状況の比喩^{ひゆ}として考えることができるだろう。

皆さんは、いろいろな事情はあれ、「好きな人生を選んでいいよ、何をやってもいいですよ」と言われているのではないだろうか。しかし、「自由があるから毎日が楽しくてしょうがない」と感じるかというのと、そうでもない。不自由なこともなく、たいていのことならやっても許される社会にいる。なのに、なんとなく息が詰まるというか、解放された気分にならない。そんな気持ちになったことはないだろうか。

これは、あまりにもドアがありすぎて外に出られない、イッシーアラールと同じ状況にあると言えるだ

ろう。自由はたくさんあるのに、そのせいで逆に自由のない気分になる。どうしてだろう。

(中略)

一般に、「自由」と言うとき、他人がいなければ一番自由だと思うだろう。他人がいると、相手のことを考えなければならぬから、勝手なことができない。あるいは他人が邪魔するかもしれないから、「自由は妨げられる」と考えられている。

でも、今日の話は、そういう常識が間違っていることを示している。人間が「自由な主体」になるためには、自分の存在を認める他人の眼差しが絶対に必要だからだ。「他人がいると自由がない」ではなく、「他人がいなければ人間は自由ではない」のだ。「自由」は、もともと他人を含み込んでいる。そして、その他人とは神のようなはたらきをする他人のことだ。

ロシアの有名な作家であるドストエフスキの『カラマゾフの兄弟』という本の中に、「もし、神様がいなかったら、人間はすべてのことが許される」という言葉がある。神様がいなければ、何も禁止をする人がいないから、まったく自由じゃないか、と言っているのだ。だが、これは間違っている。神がいると不自由ではない。神がいなければ人間は不自由になる。この場合の神というのは本物の神様でなくともいいが、人間は「神のようなもの」がなければ、自由にはなれない。

「自由」とは「責任」を担うことだ。英語で責任はレスポンスビリティ (responsibility) と言う。レスポンスビリティとはレスポンス (応答する、応える) ができるということ、つまり「責任」とは、応答できることをいう。では誰に応えるのか。「神のような存在」が私に呼びかけ、その呼びかけに応じる。それが、責任を持つということの意味なのだ。

では、最初の問いに戻ろう。我々の社会にはあふれるほど選択肢があるのに、なぜ不自由に感じるのか。それは例えばこんな感覚だと思う。目の前には選択肢がいくらでもある。インターネットで情報が得られ、「好きな人生を歩んでもいいよ」と言われ、山ほどの選択肢がある。欲しいもの、買いたいものもたくさんある。そして、「この中からどれか選びなさい」と言われる。だけど、好きなものが何かかわらないし、どれを選べばいいのかもわからない。これはどうしてなのかというと、現代社会の中で「神のようなもの」がなんらかの理由で弱体化してしまっているからだと考える。そのため自由になれない。

(「生き抜く力を身につける」〈中学生からの大学講義 5〉 大澤真幸ほか著 ちくまプリマー新書

二〇一五年 より)

問 「自由」ということについて、あなたの考えを八百字以上千字以内で述べなさい。